授業づくり編

# 1 主体的・対話的で深い学びの実現に向けた授業改善

学習指導要領に基づいて各学校で具体的に作成されたカリキュラムの実現のためには、授業改善を意識することが大切です。その際、「主体的な学び」「対話的な学び」「深い学び」を授業の中に位置付けていくことが求められます。

## ポイント① 授業改善の3つの視点と とっとりの授業改革【10の視点】

主体的・対話的で深い学びとは、「どのように学ぶか」という学び方の視点であり、学びの「形」を指すものではありません。「主体的な学び」「対話的な学び」「深い学び」の視点は、各教科等における授業改善等の取組に共通し、かつ普遍的な要素です。ここでは、国の示す授業改善の３つの視点と県が示す「とっとりの授業改革【１０の視点】」との関連について考えます。

### 主体的・対話的で深い学びの実現に向けた授業改善の視点

「小学校学習指導要領（平成29年）解説　総則編　P. 77」
「中学校学習指導要領（平成29年）解説　総則編　P. 78」

**＜主体的な学び＞**

学ぶことに興味や関心を持ち、自己のキャリア形成の方向性と関連付けながら、見通しを持って粘り強く取り組み、自己の学習活動を振り返って次につなげる「主体的な学び」が実現できているか。

**＜対話的な学び＞**

子ども同士の協働、教職員や地域の人との対話、先哲の考え方を手掛かりに考えること等を通じ、自己の考えを広げ深める「対話的な学び」が実現できているか。

**＜深い学び＞**

習得・活用・探究という学びの過程の中で、各教科等の特質に応じた「見方・考え方」を働かせながら、知識を相互に関連付けてより深く理解したり、情報を精査して考えを形成したり、問題を見いだして解決策を考えたり、思いや考えを基に創造したりすることに向かう「深い学び」が実現できているか。

### 「とっとりの授業改革【10の視点】」と関連の深い視点

| | |
|---|---|
| 主体的な学び | ① ② ③ ④ ⑦ ⑧ ⑨ ⑩ |
| 対話的な学び | ③ ⑤ ⑥ ⑩ |
| 深い学び | ① ② ③ ④ ⑤ ⑥ ⑧ ⑨ ⑩ |

とっとりの授業改革【１０の視点】を大切にして授業づくりを進めることが、主体的・対話的で深い学びの実現に向けた授業づくりの推進につながります。

## ポイント② 授業改善の3つの視点で子どもを育てる

私たちは、３つの視点を実現した子どもたちの姿を念頭に置き、その姿に近付けるためにどのような工夫ができるのか追究していくことが必要です。

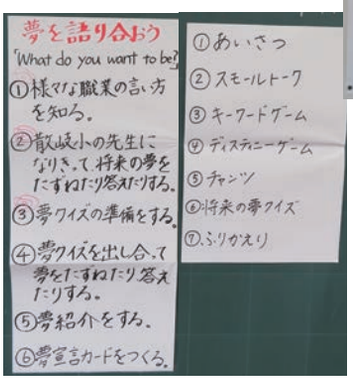
### 「主体的な学び」を実現する姿と授業改善の工夫

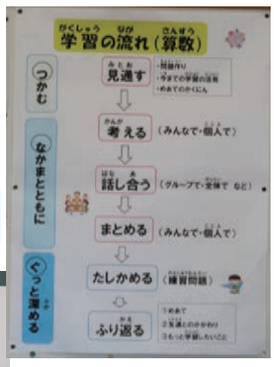
◆「主体的な学び」を実現する子どもの姿（例）
- 興味や関心を高める
- 見通しをもつ
- 自分と結びつける
- 粘り強く取り組む
- 振り返って次へつなげる

**そのために**

以下のような授業改善の工夫が大切です。
- 切実感のある課題設定
- 試行錯誤できる学習環境
- 多様な学び方の提供
- 学習内容のまとめ・適用
- 文字言語での振り返り　　等

見通しをもたせる工夫




主体的に学習に取り組めるよう学習の見通しをもったり学習したことを振り返ったりして、自身の学びや変容を自覚できる場面を取り入れましょう。

### 「対話的な学び」を実現する姿と授業改善の工夫

◆「対話的な学び」を実現する子どもの姿（例）
- 思考を表現に置き換える
- 多様な手段で説明する
- 多様な情報を収集する
- 先哲の考え方を手掛かりとする
- 互いの考えを比較する
- 共に考えを創り上げる
- 協働して課題解決する

**そのために**

以下のような授業改善の工夫が大切です。
- 対話する必然性のある課題の設定
- 学習内容等に応じたグループサイズの運用
- 情報の可視化・操作化など思考を深めるツール等の運用
- 話を聞き合える関係性の構築　　等

資料と対話
課題解決のために様々な情報を収集し、自分なりの表現にしていきます。

ペアで交流
課題解決のために、自分達の考えを交流したり、考えを修正したり、深化させたりします。

対話によって自分の考えなどを広げたり深めたりする場面を取り入れましょう。

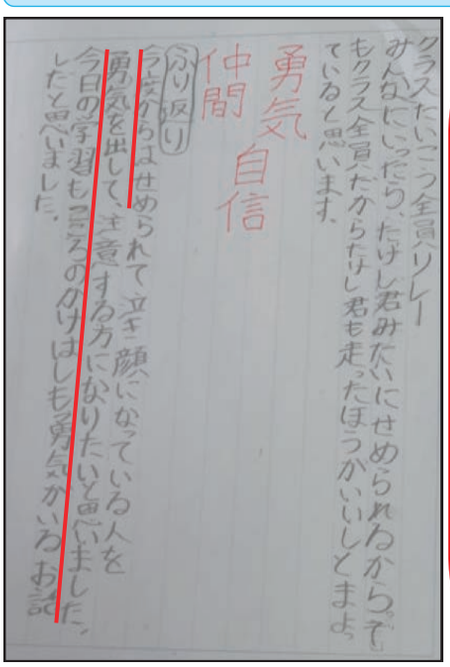
# 「深い学び」を実現する姿と授業改善の工夫

◆「深い学び」を実現する子どもの姿（例）
- 思考して問い続ける
- 知識・技能を習得する
- 知識・技能を活用する
- 自分の思いや考えと結び付ける
- 知識や技能を概念化する
- 自分の考えを形成する
- 新たなものを創り上げる

そのために

以下のような授業改善の工夫が大切です。
- 知識や技能の適用場面を設定
- 既習内容や経験と関連付けた思考の促進
- 個の思いの顕在化
- 切実な課題の設定　　等

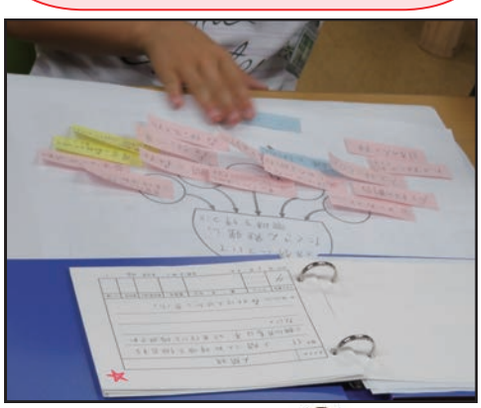
## 自分の思いや考えと結び付けた児童のノート

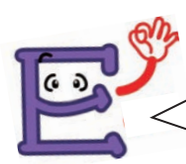



（４年）
道徳のノートより
「善悪の判断」のためには、勇気も必要だということを本時の学習で理解し、そのことは、本時までに学習した教材「心のかけはし」の学習内容にも通じることであると考えています。道徳的価値について、初めの考えをより強くもったり既習内容を想起したりしていることが分かります。

## 知識・技能の習得及び活用を意識した思考ツールの工夫

（６年）国語科
資料から得た情報をカードに書き出し、クラゲチャートを用いて整理します。自分の伝えたいことを整理していく方法を身に付けていくことができます。





学びの深まりをつくり出すために、児童が考える場面と教師が教える場面を意図的に取り入れることが大切です。

学習指導要領解説総則編には、次のように記されています。

「小学校学習指導要領（平成29年）解説　総則編　P. 77」「中学校学習指導要領（平成29年）解説　総則編　P. 78」

主体的・対話的で深い学びの実現に向けた授業改善を考えることは単元や題材など内容や時間のまとまりをどのように構成するかというデザインを考えることに他ならない。

すなわち、単元をどう構想するかが重要ということです。３つの学びの視点に立った授業改善により、学習の質を一層高めていくことで、「学習内容の深い理解」「資質・能力の定着」が図られ、児童生徒が、生涯にわたって能動的に学び続けるようにすることをめざします。

各教科・領域等の単元計画の中に、授業改善における具体的な手段として「主体的・対話的で深い学び」の視点を位置付け、授業でめざす子どもの姿を明確にして授業改善に取り組みましょう。

授業づくり編

# 2　主体的・対話的で深い学びをめざした授業づくりの実際

単元とは、各教科等における学習内容の有機的なひとまとまりと言えます。数時間で組み立てられる学習のまとまりを見通すことは、１単位時間の授業の質を向上させる点においても極めて重要です。単元のまとまりの中で「主体的・対話的で深い学び」を意識した単元及び１単位時間の学習の計画を立てましょう。

## ポイント①　単元計画は「めざす姿」を意識して作成

単元全体の流れの中で、「主体的・対話的で深い学び」の視点における学習活動を意図的・計画的・組織的に組み入れていきましょう。

### 単元構想と単元計画

単元全体を、見通す段階、児童生徒が課題解決に取り組む段階、自分の学びを振り返り、次につながる学びの段階を設定していくことを意識して単元を構想します。その構想を基にして、実際に単元の学習過程を計画していきます。

### ①　単元を構想する

どんな授業にするのか、事前にしっかりと構想を練ることが大切です。

単元構想のポイント

◆育成をめざす資質・能力の確認
　学習指導要領に示された内容を学習指導要領解説をもとにしながら確認します。

◆単元の目標の設定
　学習指導要領解説と児童生徒の実態をもとに、単元の目標をとらえます。

◆教材・題材の検討
　教材・題材が、目標達成に適しているか、魅力は何かなどを検討します。また、当該単元の学びに関係のある既習内容を洗い出します。

◆児童生徒の実態の整理
　当該単元に関係することを中心に、児童生徒の学びの成果や課題を整理します。

◆「主体的・対話的で深い学び」の視点に立った指導の工夫
　当該単元の中で実現したい児童生徒の学びの姿を明確にします。どの場面でどのような学習活動を組んでいくのか、単元全体を見通して計画的に考えていきます。

「主体的な学び」「対話的な学び」「深い学び」は、これらすべてを１単位時間の中で実現するのではなく、単元や題材といったまとまりの中で実現をめざすものです。したがって、見通しをもって計画的に設定することが大切です。

## ② 単元計画を立てる

単元全体を見通した構想を基に、１時間１時間の計画を立てていきます。

**「本時のねらい」「学習活動」「『主体的・対話的で深い学び』の実現のための授業づくりの工夫」「評価規準」「めざす児童生徒の姿」等を単位時間ごとに整理します。**

第１学年（国語科）
単元名　いわみの　のりもの　だいしゅうごう！
～ガイドになって　しょうかいしよう～
題材名「いろいろな ふね」（出典:「あたらしいこくご」（一年下 東京書籍）

単元の指導計画（全１１時間）

| 次 | 時 | 主な学習活動 | ・指導上の留意点　◇評価規準（評価方法） |
|---|---|---|---|
| 一 | 1 | ○「のりものカード」を作り、紹介するというめあてをもち、学習の見通しをもつ。 | ・岩美町のいろいろな乗り物について知っていることや乗車体験した感想を話すことで読みの意欲が高まるようにする。<br>◇〔関〕「のりものカード」づくりに興味を |
| 二 | 1 | ○ 文章を「はじめ・中・おわり」に分け、中のまとまりにある４つの船の名前と順序を確かめる。 | ・文章の<br>に、色<br>学習の<br>◇〔読ア<br>大体を |
| | 2 | ○ 客船の「役目」「つくり」「できること」を見つけながら読む。 | ・「役目」<br>確認し<br>えるこ<br>◇〔読ア<br>こと」<br>み、大<br>◇〔言カ<br>係に気 |
| | 3 | ○ フェリーボートの「役目」「つくり」「できること」を見つけながら読み、自分の思いを書き加える。 | ・助詞や<br>ボート<br>くよう<br>◇〔読ア<br>た「つ |

実践例①
学習指導案に「主体的・対話的で深い学び」の視点のピクトグラム(＊)を取り入れ、単元計画を立てている。
（＊：独立行政法人教職員支援機構作成）

実践例②
とっとりの授業改革【10の視点】との関連を示している。

第２学年（国語科）

単元名　言い伝えられているお話をしょうかいしよう
中核教材　にほんのことのは「言いつたえられているお話を知ろう」（東京書籍２年上）
補助教材　並行読書に用いる図書（神話・伝承）

5　単元構想（全６時間）

| 時 | 学習活動 | 指導上の留意点と【とっとりの授業改革 10 の視点】 | 評価 |
|---|---|---|---|
| 1 | ○「だいだらぼう」の読み聞かせを聞いて、感想を伝え合い、単元の学習課題をとらえる。 | ・読み聞かせの際には、独特な語り口のおもしろさや味わいを生かした読み方を心がけたり、児童参加型の読み聞かせをしたりする。【①】<br>・お話の感想を伝承独特の語り口調にも着目しながら話し合わせる。【⑥】<br>・自分達の地域の伝承に関心が向くよう、地名や山の名前などに着目した意見を取り上げ、もっと読んでみたいという意欲化をはかる。【①②】<br>・単元計画を示し、学習の見通しをもてるようにする。【①】 | ○伝承に興味を持ち、楽しんで読み聞かせを聞こうとしている。（発言・行動観察・ノート） |
| 2 | ○「いなばの白うさぎ」を聞き、感想を伝え合い、クイズを通して内容に触れる。<br>○「いなばの白うさぎ」にまつわる神話の読み | ・登場人物やその行動、場面の様子などに関わるクイズを出すことで、お話の内容に楽しく触れられるようにする。【②】<br>・クイズでは答えの選択肢を与え、答えやすくする。【⑦】<br>・自分の住む地域に伝わる神話について、家の人にも聞いてくるよう促すことで、言い伝えられているお話に興味をもてるようにする。【⑨】<br>・児童が読み聞かせをする際の手本となるよう、「読み名人になるにはカード」に、読み聞かせの仕方の工夫の観点を示す。【①】 | ○神話について知り、神話の読み聞かせを楽しんで聞いている。（発言・行動観察・ノート） |

実践例③
気高中学校区では、とっとりの授業改革【10の視点】の中から重点的に意識する視点を３つに絞り、「けたか３」と名付け、指導案に明記するなどして、共通実践に取り組んでいる。

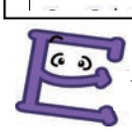
第１学年（生活科）

本時目標
友だちと相談したり、試したりしながら道具や遊び方を工夫することを通して、２人で楽しいシャボン玉遊びをすることができる。

学習過程

| 学習活動 | 指導上の留意点（・）支援（※）評価（☆） | 時間 |
|---|---|---|
| 1　本時の活動やめあてをつかむ。<br>・モールを使ってかわいい形にしたよ。<br>・もっと大きなシャボン玉がつくりたいな。 | ・前時までのシャボン玉遊びを記録したものを提示して、今までのシャボン玉遊びを振り返る。「けたか３」①<br>・シャボン玉遊びをするときの安全のための注意や場所の設定を確認する。<br>・汚れたり、濡れたりしてもよい服装をさせる。 | 5/5 |
| もっとたのしい「２人のしゃぼんだま」をつくってあそぼう | | |

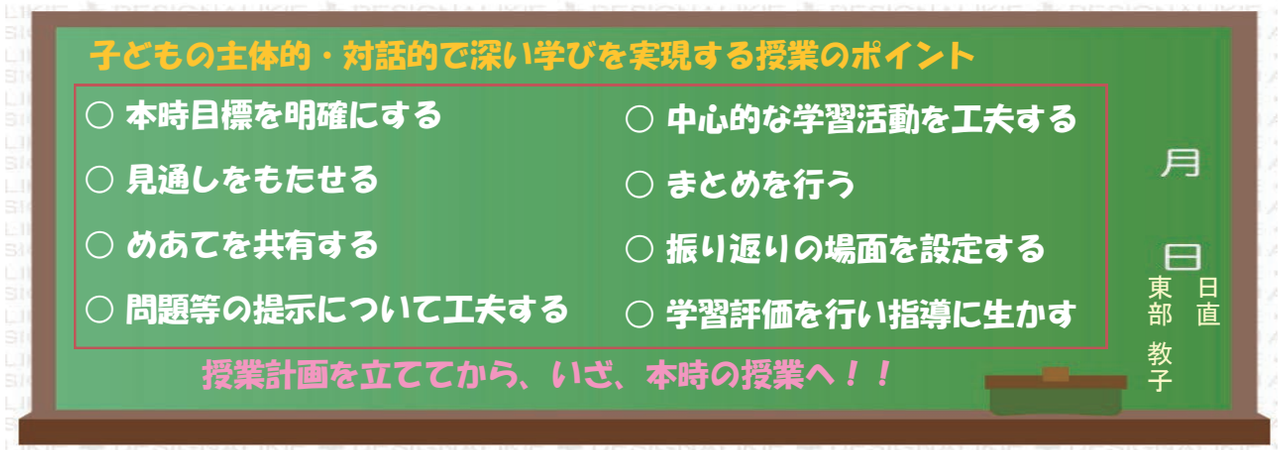
「けたか３」には、とっとりの授業改革【１０の視点】の①⑤⑧が当てはまります。授業の導入、展開、終末部分に関わる内容であり、授業全体を構成する上で、意識したい視点ばかりです。



どのような項目を盛り込むかについて共通理解を図り、明確な指導観をもった「実効性のある」「使える」単元計画を作成していきましょう。

## ポイント② 本時の授業は、単元の1（ワン）ピース

単元の中の１単位時間であることを念頭におき、児童生徒の学びのつながりを意識した授業づくりをすることが重要です。本時はゴールイメージを完成させるための一つのピースであると考えると、一層、１時間１時間が重要になります。




以下、８つのポイントを詳しく説明します。

### 本時目標を明確にする

その時間で育成をめざす力を明確にして、児童生徒の実態を基に、本時目標を設定します。本時目標の設定と併せて、評価規準も作成する必要があります。

目標を明確にすると・・・
★進むべき学びの方向が定まる
★より分かりやすい授業づくりにつながる

本時目標は、その時間の学びによって達成される児童生徒の具体的な姿で設定することが大切です。

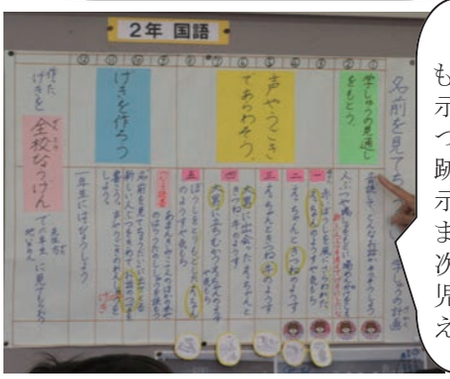
### 見通しをもたせる

児童生徒が「見通しをもつ」とは、学習課題を把握し、どのようにすれば課題を解決できるのか、どのような答えが考えられるのか等についてイメージをもつということです。

見通しをもたせると・・・
★児童生徒がこれまでの学びにも着目する
★児童生徒の「できそうだ」「こうしたい」という気持ちが高まる

児童生徒の主体的な学びを実現するためにも、児童生徒が学習課題を確実につかんだり、解決の方法や答えの見通しをもったりすることが、極めて重要になります。

とっとりの授業改革【１０の視点】の①「魅力的な課題・教材の提示」と関連しています。




単元の見通しをもたせるための掲示。授業が進むにつれて、学びの足跡が追加され、掲示物が増えていきます。前時と本時、次時のつながりを児童が視覚的に捉えられます。

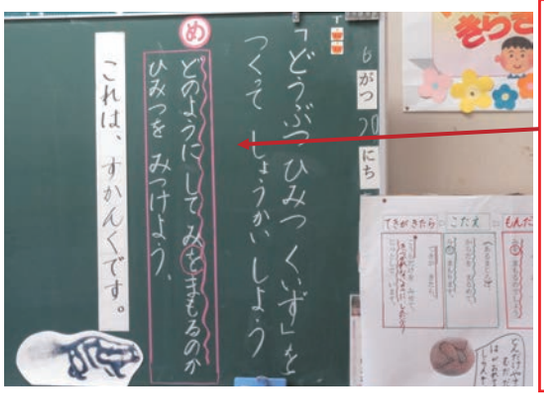
言語材料を意識して作成したTシャツ

## めあてを共有する

めあては、学習の冒頭で教師が提示したり、見通しをもった結果として明確になったりするものです。授業の中のどの場面でどのように提示するのかは、それぞれの教科・領域等の特質によって変わります。

**めあてを共有すると・・・**
★児童生徒が学びの必然性を意識できる
★児童生徒の学び合いが充実する

めあては、児童生徒が学びの連続性を意識できるものにすることが大切です。




単元計画や既習事項の掲示を基に、児童が関心をもち理解しやすい表現で設定されためあて

## 問題等の提示について工夫する

とっとりの授業改革【１０の視点】①「魅力的な課題・教材の提示」と関連しています。

単元の目標を達成するために、１単位時間ごとの問題等を設定します。児童生徒に提示する場合は、単元の中の授業間のつながりを意識できるような工夫も大切です。

**問題等の提示を工夫すると・・・**
★児童生徒が学びの連続性を意識する
★児童生徒の「できるようになりたい」「分かりたい」という気持ちが高まる

児童生徒が問題に向かう必然性を意識したり、本時の問題等を自らの問い（解決したい課題）として受け止めたりすることが大切です。

担任の先生が写った写真に興味を惹かれ、「実際はどうなのだろう。」「調べたい。」と追究が始まりました。比較の基準が示されており、既習事項を活用しながら考えを整理していきました。

## 中心的な学習活動を工夫する

問題の解決に向けて、既習事項を活用したり、利用できる情報を収集したり、様々な情報を比較・関連付けながら考察したりします。

他者との交流を通じて、自分の思考の中身をより明確に意識したり、他者の考えを聞くことで、問題解決に必要な視点を増やしたりできるようにすることも大切です。

**中心的な学習活動を工夫すると・・・**
★児童生徒の学びが深まる
★児童生徒の学びが定着する

明確な課題意識のもと、自分なりの考えをもって互いの考えを交流する活動を位置付けることが大切です。その際、話合いの意図とゴールが明確に意識されるように、教師の具体的な指示等が必要となります。

とっとりの授業改革【１０の視点】の
②「体験的な学習の充実」
③「資料の活用」
④「思考の整理」
⑤「説明・発表の機会の充実」
⑥「学び合う活動の充実」
に関連しています。

実験・観察・考察、共有、発表、役割演技、ポスターセッション、話合い等、ねらいや学習展開によって工夫できます。

## まとめを行う

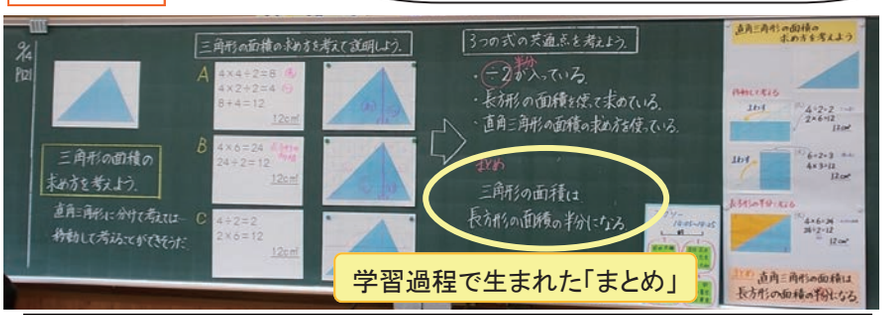
めあてをもとに学習活動に取り組んだ結果として得られたことを、学級全体で共有します。

まとめを行うと・・・
★課題解決の方法や考察の結果が確認できる
★結果から一般化できる（汎用性のある）ことが確認できる

まとめは、児童生徒の実感の伴ったものとなるようにしたいものです。そのためにも、児童生徒の言葉を生かしたまとめが望まれます。

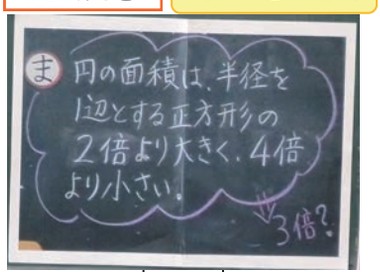
とっとりの授業改革【１０の視点】の④「思考の整理」⑥「学び合う活動の充実」と関連しています。

実践例①




それぞれの考え方を発表し合い、説明し合った後、子どもたちの言葉を手がかりに「まとめ」が行われました。

実践例②　「まとめ」の活用



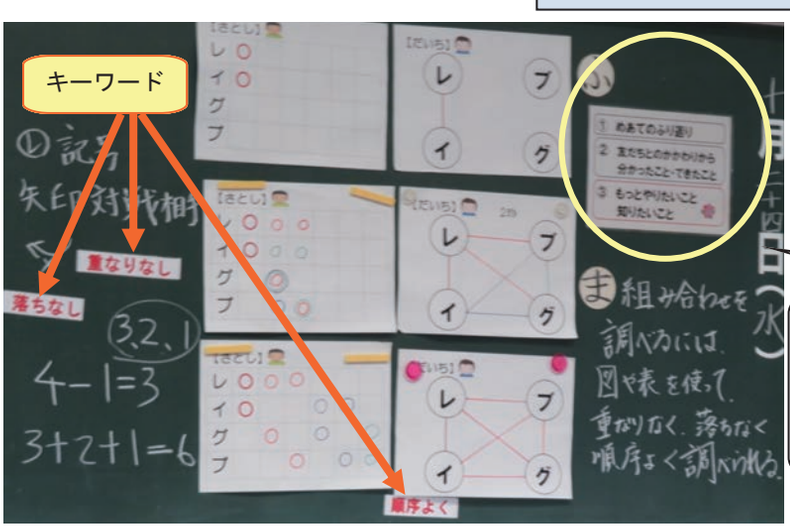

このまとめが、次時の学習の導入時に活用され、「円の面積」を求める学習につながりました。

## 振り返りの場面を設定する

本時の学習で、何を学んだのか、その学びはなぜ生まれたのかなどを振り返らせることによって、学びの手応えを感じさせたり、その学びを生かした次の学びへの意欲を高めさせたりすることが大切です。

振り返りを行うと・・・
★児童生徒が、何が分かったのか、何ができるようになったのかを実感できる
★未解決な部分やさらに追究したい内容が分かる

次のような、振り返りのための問いも効果的です。
- 何ができるようになりましたか。
- 何が分かりましたか。
- なぜできるようになりましたか。
- なぜ分かりましたか。
- 次の時間に何を学びたいですか。
- 次の時間にどんな学び方をしたいですか。




とっとりの授業改革【１０の視点】の⑧「学習を振り返る活動の設定」に関連しています。

**振り返りの視点**を示した上で、本時の振り返りとして指導者が求める項目について、記述するよう指示します。これにより、指導者が本時の学習内容の理解を見取る一助となります。

## 学習評価を行い指導に生かす

指導と評価の一体化が大切です。

学習評価は、評価規準を基に行います。評価規準は、「評価規準の作成、評価方法等の工夫改善のための参考資料」（国立教育政策研究所）を基に作成します。

学習評価を行うと・・・
★児童生徒が、自らの成長を実感し、意欲が高まる
★教師が、目標や計画、指導方法の改善・充実に取り組むことができる

学習評価は指導に生かされなければなりません。本時の支援へとつなげたり、次時以降の指導に反映させたりします。

とっとりの授業改革【１０の視点】⑦「学習評価の推進」と関連しています。

**【参考】１時間の授業の中に、とっとりの授業改革【１０の視点】にかかわる場面がたくさんあります。**

【第２学年　国語科】単元名「生きものってすごいな！～絵コンテでつたえよう～」

（３）学習過程

| 学習活動 | ○主な発問・予想される児童の反応<br>主な思考方法＜　＞　＊学習用語 | 指導上の留意点・支援<br>※評価規準【　】（方法） |
|---|---|---|
| 1　ダムの大きさを思い浮かべ，本時の学習のめあてを確認し音読する。 | ○ビーバーが作ったダムはどれぐらいの大きさだったかな。<br>・長さが４５０メートルだったよ。<br>・高さは２メートルだよ。 | ・ダムの大きさを想起することで，ダム作りの順序を教材文から見つけたいという意欲を引き出したい。 |
| ビーバーってすごいな！どのようにダムを作るのか読みとろう。 | | |
| ビーバーがダム作りをする順序を考え，話し合う。<br>○コマカードをダム作りの順に並べ，話し合う。<br>・個人で考える。<br>・ペアで確認する。<br>・代表ペアの発表。 | ○ダム作りの順に絵コンテのコマカードを並べよう。<br>＜ならべる＞<br>①木をくわえたまま水の中にもぐります。<br>②木のとがった方を川のそこにさしこみます。<br>③その上に小えだをつみ上げていきます。<br>④上から石でおもしをします。<br>⑤どろでしっかりかためていきます。<br>⑥家族そう出でしごとをつづけます。<br>＊主語<br>＊述語 | ・教材文Ｐ４０，４１の写真は，ビーバーのどの行動を表しているか確認する。<br>・１つのコマに１つの行動を書きこまれたコマカードを配布し，順序に気をつけて並べさせる。<br>・なぜその順に並べたか話し合わせる中で，関係のある叙述に注目させる。<br>※【読】ダム作りの順序に沿ってコマカードを並べている。<br>（絵コンテ②） |
| ○コマに一言ずつ大事な言葉を書く。 | ○このビーバーは何言で言いましょう。<br>①もぐる②さしこむ<br>④おもしをする⑤か<br>⑥つづける | ・コマのビーバーの行動を一言で要約することで，順序の根拠を理解できるようにする。<br>要約に困ったり，よう助言書けた児 |
| ダム作りをするビーバーのすごいと思ったことを交流する。 | ○ダム作りをしているビーバーのすごいと思ったことを吹き出しに書こう。<br>・家族で協力するから，あんなに大きなダムができるんだ。<br>・夕方から夜中まで仕事を続けるなんてすごい。 | ・コマに対いと思っ言する。<br>・ビーバー家族でビーバーわわせた |
| 4　ふり返りをし，次時への見通しをもつ。 | ○今日の学習をふり返りましょう。 | ・次時は，について認する。 |

本時の学習とめあての確認【視点①】

児童の学ぶ意欲を引き出す場面【視点①】

本時目標を見取る規準の設定【視点⑦】

個人で考え、他者と考えを交流する場面【視点④⑤】

学び合う活動を充実させるための書く活動の設定【視点⑥】

振り返りと次時への意欲付けの場面【視点⑧】

本時の展開には、とっとりの授業改革【１０の視点】が複数見て取れます。言い換えると、主体的・対話的で深い学びの実現に向けた学習活動が位置付けられているということになります。このような学習展開を意識して、授業づくりを進めましょう。

まずは、その単元で育成をめざす力を明確にして、児童生徒の実態把握に基づき、「主体的・対話的で深い学び」の実現を意識した単元計画を作成しましょう。そして、それに基づく１単位時間ごとの授業計画を作成して授業に向かうことが大切です。

# 3　大切にしたい学びを支える技

「子どもたちの学力を向上させたい」「分かる授業づくりをしたい」「学び合いのある授業にしたい」等、指導者として常に向上心をもって取り組むことが大切です。子どもたちの学びを充実させるためにも、次のような工夫を意識して授業改善を進めましょう。

## ポイント①　学習意欲を引き出す発問

発問とは、本時の目標を達成させるために教師が発する問いであり、児童生徒の学習意欲を引き出したり、思考や活動を促し、授業の流れを作ったりするものです。

### 1　発問の種類

①経験したこと、知っていることなどを問う発問
　（例）「〇〇について、知っていることはありませんか？」
②問題場面の原因を考えさせたり、結果を推測させたりする発問
　（例）「このようになったのは、なぜでしょう？」
　　「〇〇を■■にすると、結果は、どうなるでしょう？」
③比較させたり、選択させたりする発問
　（例）「①と②では、考え方にどのような違いがありますか？」
　　「もっと〇〇にするには、どちらの解き方がよいでしょう？」
④振り返りを促す発問
　（例）「何ができるようになりましたか？」
　　「次の時間に何を学びたいですか？」

児童生徒の反応が気になり、問い方や問う内容を変えていくと、かえって子どもたちは、混乱してしまうこともあります。発問は明確にしましょう。

＊詳しくは、「学力向上を支える基盤づくりに向けて」をご覧ください。

### 2　発問する際の留意点

①児童生徒が、聞く姿勢になっていることを確認する。
②内容が把握しやすい明確な問いにする。
　・はっきりと一度で問う。
　・反応を待つ。
③多様な考えを引き出す問いにする。

（例）第３学年

単元名　わたしのまち みんなのまち（第３学年）

目　標　Ａ町の土地の様子を地形的な条件や社会的な条件と関連付けて考えることができる。

例①　写真や資料をもとに、白地図や表にまとめてみて、どんなことに気付きましたか。

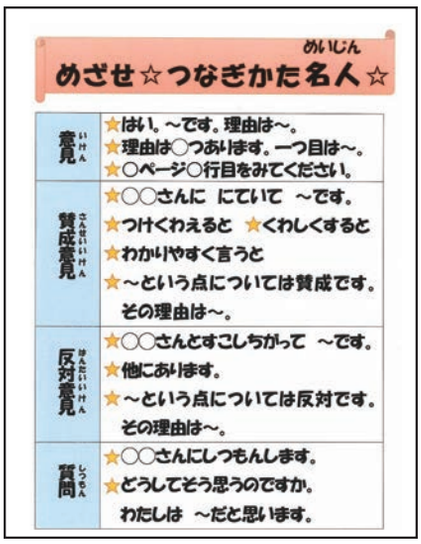
例②　なぜ、土地の広い南側ではなく、北側に家がたくさん集まっているのでしょう。

例①の発問に対して、児童は、様々な気付きを挙げると考えられます。根拠となる資料等を示しながら説明する児童もあるかもしれません。しかし、例①の気付きを基にして例②のように重ねて発問することで、「分布」や「広がり」「自然条件」などの視点を意識して答えようとします。発問を工夫することで、より深い学びにつながると考えられます。

## 3　発言の取り上げ方、つなぎ方

児童生徒の発言を受けて、それをつなぎながら、子どもたちとともに学習を進めていくことで授業が充実していきます。

〈教室掲示より〉
聞き方、話し方の視点を整理した掲示物で、子どもたちに「考えをつなぐこと」を意識させるのも、一つの方法です。



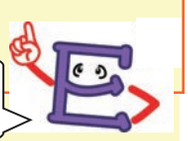

（留意点）

| | |
|---|---|
| 児童生徒の発言を的確に評価する | 一人一人の考えのよさやつまずきを把握し、支援に生かします。 |
| 誤答を大事に扱う | 誤答の問題点について解決する過程を通して、学級全体の学びに広げていきます。 |
| 発言を教材化する | 一人の発言を全体で取り上げ共有することで、他の児童生徒の思考のヒントになります。 |

### 【参考】思考を活性化させるための問いについて

思考が動く活動をつくる「動詞」（例）

教科や領域の特性に合わせて、工夫して使えそうですね。

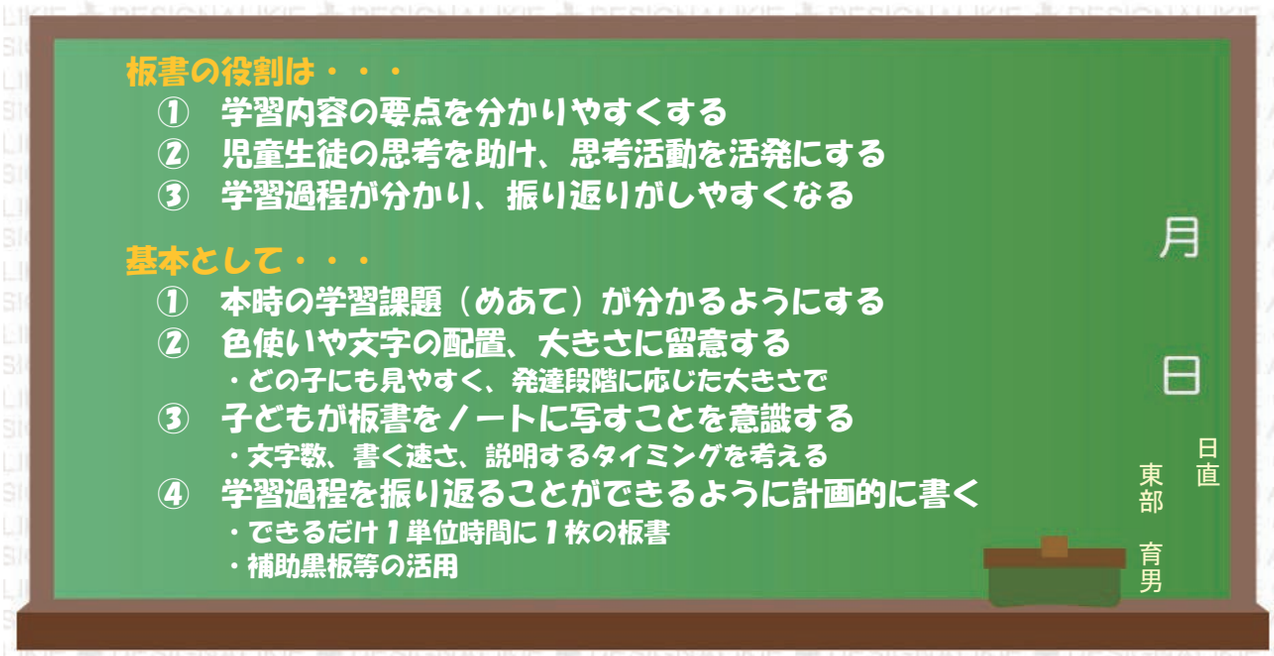


| 考えるための動詞 | 発問の例 |
|---|---|
| 比較する | ○○と△△の違いは？　共通点は？ |
| 分類する | どんなグループ分けができるだろう？　分ける基準は？ |
| 関係づける | ○○と△△はどんな関係だろう？　原因は何だろう？ |
| 視点（立場）を変える | ○○の視点・別の人の立場からみるとどうだろう？ |
| 推論する・適用する | 身近な問題・別の問題にあてはめるとどうなるかな？ |
| 具体化する | 図に表してみよう |
| 選択・判断する | どの考えがいちばんよいだろう？　なぜそう思う？ |
| 見通す | 結果はどうなるだろう？　大切にしたい価値が実現するか？ |
| 批判する | ほんとうにそれでよいか？　ほかの方法はないか？ |
| 振り返る | 学んだこと，よかったこと，これからの課題は何だろう？ |

（国立教育政策研究所　西野真由美 氏）
「考え，議論する道徳を実現する！主体的・対話的で深い学びの視点から（図書文化）」

## ポイント② 思考を助ける板書

児童生徒が見て、本時の目標が分かり、学習を振り返ることができる板書をめざすことが大切です。そのためには、板書の役割をしっかりと理解し、子どもたちの目線に立った板書を行う必要があります。

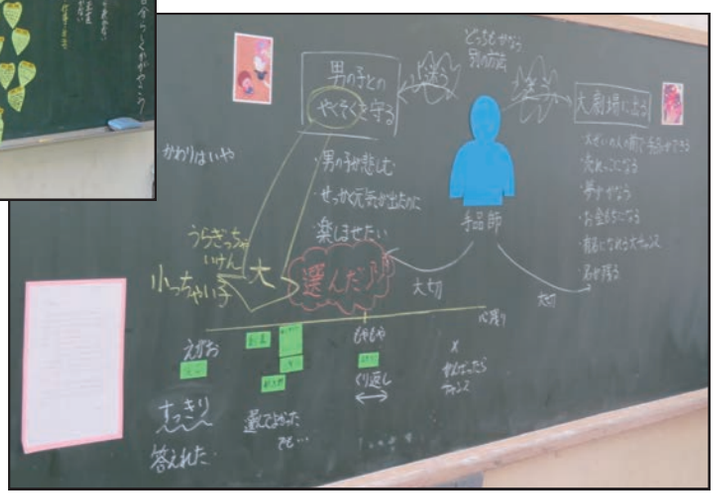



（板書の例）

【道徳科】

第５学年の「手品師」を教材とした授業の板書です。指導者の指導観に基づいて、板書も異なります。共通している点として、子どもたちの言葉を大切にして生かし、さらに本時の学びの過程が分かる板書となっている点です。

児童生徒に伝えたいことをはっきりともって授業を行いますが、授業の前に、本時で押さえたいこと、育成をめざす力を明確にして「板書計画」を立てることは、授業づくりで大切なポイントです。




いずれの授業においても、指導者が板書計画を立てた上で、授業に臨んでいます。

# ポイント③ 学ぶ意欲につながるノート指導

書くことによって、子どもたちは思考過程を整理することができます。また、板書を書き写すことで、学習内容の要点を整理することができます。子どもたちの学ぶ意欲を高めるノート指導が大切です。

## 1　ノートづくりの目的

○学習内容を残す。
　⇒学習の記録が残り、学びを振り返ることができる。
　⇒学習内容が継続して捉えられるとともに、主体的な学びに発展できる。
○書くことにより学習内容を整理する。
○要点を明確化する。

## 2　ノート指導のポイント

前時の学習や家庭学習を本時に生かせるようなノートづくりが大切です。

○教科の特性や目的に応じた書き方の指導を行う。
○ガイダンスを行う。
・ノートづくりの目的を伝える。
・記入のきまりを確認する。（日付、学習課題（めあて）、見出し、色の使い分けなど）
・ノートづくりの手引きや過去のノートを例示し、理想的なノートをイメージさせる。

**理想的なノートにするために…**

板書を写すだけでなく、自分の考えたことや分かったこと、疑問も書くようにさせよう。

言葉、絵、図、オリジナルキャラクター、吹き出し、付箋紙などを使って、自分だけのノートづくりを支援しよう。

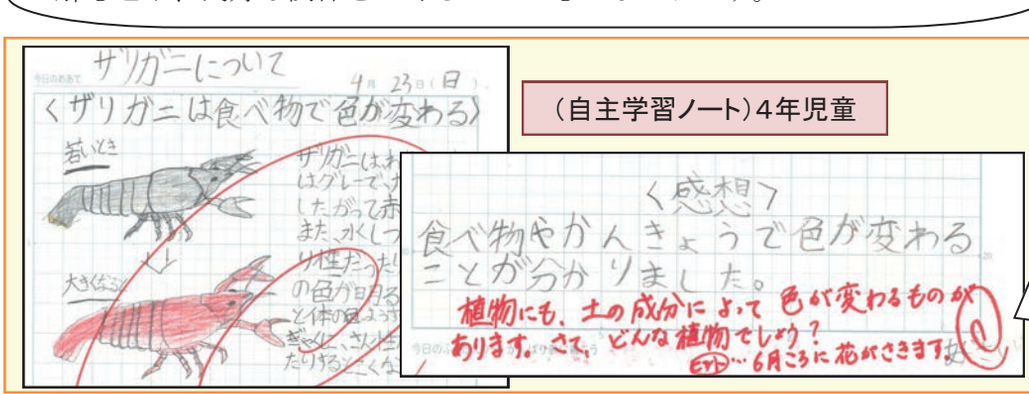
発達段階、教科の特性を考慮したノートを選ぼう。（マス目の大きさ、罫線の幅、無地等）

○書く速さや書く分量、丁寧さなど、個人差に対応する。

## 3　点検と評価

○ノートの上手な使い方の例を、教室内に掲示したり、学級通信やノート展示会などで紹介したりして、効果的なノートづくりを働きかける。
○可能な限り授業後にノートを回収し、点検・評価を行う。

学習内容の理解やノートの書き方などへの助言や励ましの言葉、感想を教師が記述することで、子どもたちの授業への意欲を高めたり、学びを深めたりするきっかけとなります。ノート指導を通じて、児童生徒理解も進み、良好な関係をつくることにもつながります。




（自主学習ノート）4年児童

児童が興味をもった内容、感想に共感しながら、新しい視点を与える担任のコメントがあります。

## ポイント④　活動に適した学習形態を選ぶ

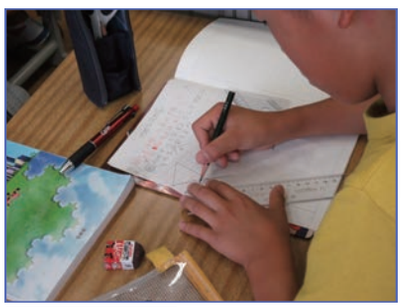
**児童生徒が、主体的で対話的に学ぶ授業にするためには、目的に応じた環境作りが欠かせません。教科の特性、学習内容、児童生徒の実態等を考慮し、全体、小集団、個人など学習形態を工夫することが大切です。**

小集団といっても、ペアやグループ学習などそれぞれに特徴があり、期待される効果も異なります。問題解決の過程が協働的なものになるように、日頃から目的に応じた適切な学習形態を工夫していきましょう。

| 集団の規模 | 個　人 | ペ　ア | 少人数のグループ | 全　体 |
|---|---|---|---|---|
| 特　徴 | ・一人でじっくりと取り組める。 | ・気軽に短時間で交流できる。<br>・隣りの席、前後、自由に相手を見つけるなど工夫できる。<br>・聞く・話す立場が明確になる。 | ・複数の考えを交流でき、自信がもてる。<br>・多様な意見と出会えるため、考えを広げたり深めたりできる。 | ・多様な考えを基に、学級全体で話し合い、よりよい解決に向けて学びを深め、学習内容を共有できる。 |
| 留意点 | ・自分の考えをもてなかったり一人で取り組めなかったりする場合は、支援が必要である。 | ・ペアの関係性に配慮する。 | ・話合いや活動に参加しにくい児童生徒に支援が必要である。<br>・司会や記録など役割を決める等のルールがあるとよい。 | ・学級が、安心して意見を出し合える場であることが求められる。<br>・参加しにくい児童生徒の出番を考慮した働きかけが必要である。 |

１単位時間を通して同じ形態で行うこともありますし、学習内容や目的、学習過程、児童の実態等によってはこれらを複数取り入れて授業を進めることも可能です。児童生徒が、主体的に授業に向かい、対話を通して深く学べるよう、目的に応じて学習形態を工夫しましょう。

（実践例）単元名　図形の拡大と縮小（第６学年）
本時のめあて「どんな形になるか予測して、点対称な図形を作図しよう。」



個人の学び

ペアでの学び

１単位時間の中で、目的に応じて学習形態を工夫しています。

自由に動きながらの学び

全体での学び

# ポイント⑤　活動を充実させるＩＣＴ活用

ＩＣＴそのものが、児童生徒の学習を主体的で対話的にするのではありません。児童生徒の学びを充実させ学力向上につなげていくためには、指導者が意図的に授業の中でＩＣＴ機器を使用したり子どもたちに活用させたりすることを、学習過程に組み入れることが大切です。学習指導要領には、小学校においてプログラミング教育を必修化するなど、情報活用能力を言語能力等と同様に「学習の基盤となる資質・能力」と位置付けるとともに、学校においてＩＣＴ環境を整え、それを適切に活用した学習活動の充実を図ることが明記されています。

## 1　ＩＣＴ活用の目的

＊ICT：Information and Communication Technology

○学習に対する児童生徒の興味・関心を高める
○児童生徒一人一人に課題を明確につかませる
○分かりやすく説明したり児童生徒の思考や理解を深めたりする
○学習内容をまとめる際に児童生徒の知識の定着を図る

各教科における主体的・対話的で深い学びの促進、児童生徒の情報活用能力の効果的な育成につながるように、使用する教科・領域や教材、児童生徒の実態等に応じて、適当なＩＣＴ機器を活用し、学習内容の理解や課題解決、基礎的・基本的事項の定着等に役立てることができます。

それぞれのＩＣＴ機器の特性を見極めた上で、児童生徒の学習をより充実させるために効果的な機器を選択するようにしましょう。

**ＩＣＴ機器**

パソコン、プロジェクター、大型テレビ（ディスプレー）、電子黒板、実物投影機、書画カメラ、デジタルカメラ、ビデオカメラ、タブレット型コンピュータ、ＩＣレコーダー　等

## 2　ＩＣＴの活用

授業において、どの場面でどのように活用するか授業計画を立てることが大切です。

**○ＩＣＴの活用例**

社会科：情報を収集・整理し、プレゼンテーション用ソフトを活用して説明する。
算数・数学科：数量や図形の学習で、変化や移動などを視覚的にとらえやすくする。
理科：観察や実験の記録、集計、グラフ化などを行う。
国語科：発表場面を録画して再生しながら改善点について話し合う。
反復学習の場面：活動内容や方法を工夫することで、児童生徒が意欲的に取り組み、学習内容の定着を支援する。また、一人一人の学習ニーズや個性等に応じた対応も工夫できる。

教科を問わず、鑑賞や動作の確認など記録し映像を生かす場面でも活用できそうです。

**○活用場面例**

「授業の導入」　問題提示や既習事項の確認
「授業の展開」　児童生徒が課題解決に活用、児童生徒の学びの共有
「授業の終末」　学習の振り返り、まとめの提示

☆　よりよく活用するための留意点　☆
①黒板やホワイトボードよりも、プロジェクターや電子黒板が適しているか。
②スクリーンや電子黒板等の位置は、どの子どもにも見やすいか。
③インターネットでの調べ活動と図書などによる調べ活動の長所や短所をつかんでいるか。
④授業の中断を防ぐために、必ず使用する機器の起動を確認しておく。
⑤インターネット上の資料や画像等を使用する際には、著作権等に配慮する。

書画カメラの使用により、様々な角度で拡大して鑑賞できる。

授業づくりでは、子どもたちに「おもしろい」「もっと学びたい」と思わせるような工夫が大切です。そして、「分かった」「できた」という経験を授業の中で重ねていくことが求められます。だからこそ、学習指導の基本に立ち返ることが、授業改善への近道と言えます。

授業づくり編

# 4　特別の教科 道徳

小学校においては平成３０年度、中学校は３１年度から全面実施の特別の教科 道徳。「主体的・対話的で深い学び」を意識した授業づくり、評価等について、理解し取り組んでいくことが求められます。

## ポイント① 道徳科における「見方・考え方」は、目標に明記されている

「特別の教科 道徳」は、その目標の中で育成をめざす資質・能力とその資質・能力をどのような学習によって養うのかが示されています。「特別の教科 道徳」の目標を知ることが、道徳科の充実には欠かせない最重要事項と言えます。

### 道徳科の目標

（小学校学習指導要領 第3章 特別の教科 道徳 P.165）
（中学校学習指導要領 第3章 特別の教科 道徳 P.154）

**道徳科の目標**（小学校）
第１章総則の第１の２の（２）に示す道徳教育の目標に基づき，よりよく生きるための基盤となる道徳性を養うため，
道徳的諸価値についての理解を基に，自己を見つめ，物事を多面的・多角的に考え，自己の生き方についての考えを深める学習を通して，
道徳的な判断力，心情，実践意欲と態度を育てる。

**道徳科の目標**（中学校）
第１章総則の第１の２の（２）に示す道徳教育の目標に基づき，よりよく生きるための基盤となる道徳性を養うため，
道徳的諸価値についての理解を基に，自己を見つめ，物事を広い視野から多面的・多角的に考え，人間としての生き方についての考えを深める学習を通して，
道徳的な判断力，心情，実践意欲と態度を育てる。

青字で記した部分が、期待される授業の有り様です。特に、下線部は児童生徒の学習の姿として強く意識すべきことになります。下線部のような学習状況が実現されているかを評価し、指導に生かすことが重要となります。

## ポイント② 「道徳性」は、よりよい行為へのエネルギー

道徳科の目標に「道徳性を養う」という表現があります。道徳科で育てることをめざす資質・能力としての「道徳性」について、学習指導要領解説には、次のように整理されています。

文部科学省　道徳教育アーカイブ「特別の教科　道徳の全面実施に向けて」より引用

**道徳性とは**
- ■よりよく生きるための営みを支える基盤となるもの
- ■人間としての本来的な在り方やよりよい生き方を目指して行われる道徳的行為を可能にする人格的特性であり，人格の基盤をなすもの
- ■人間らしいよさであり，道徳的価値が一人一人の内面において統合されたもの

**道徳性は、**
**よりよい行為へのエネルギー（内面的資質）です。**
- ・道徳的判断力
- ・道徳的心情
- ・道徳的実践意欲と態度

特に序列や段階があるということではない。

→ よりよい行為（道徳的行為）（道徳的習慣）

目に見える道徳的実践の姿は、目に見えない内面的資質に由来しています。

## ポイント③　内容項目に含まれる道徳的価値を読み取る

内容項目は、道徳的価値を含む内容を短い文章で表したものです。内容項目及びその内容に示されていることを基に、含まれる道徳的価値について把握することが大切です。そして、本時で子どもたちに考えさせたい道徳的価値は何かを明確にした上で授業を行います。

| 小学校 | 内容項目の数 |
|---|---|
| 低学年 | １９項目 |
| 中学年 | ２０項目 |
| 高学年 | ２２項目 |

| 中学校 | 内容項目の数 |
|---|---|
| 全学年 | ２２項目 |

個々の内容項目には、単一の道徳的価値が含まれているものや複数の道徳的価値が含まれているものがあります。この時間には、何を指導するのかを明確にもち、授業を構想しましょう。

内容項目に含まれる道徳的価値の例（高学年の内容項目より）

| | | |
|---|---|---|
| 友情、信頼 | 内容項目 | 友達と互いに信頼し、学び合って友情を深め、異性についても理解しながら、人間関係を築いていくこと。 |
| | 道徳的価値 | 友情、協力、信頼、異性尊重 |
| 規則の尊重 | 内容項目 | 法やきまりの意義を理解した上で進んでそれらを守り、自他の権利を大切にし、義務を果たすこと。 |
| | 道徳的価値 | 規則尊重、公徳心、権利、義務 |

## ポイント④　道徳科の評価の考え方を知る

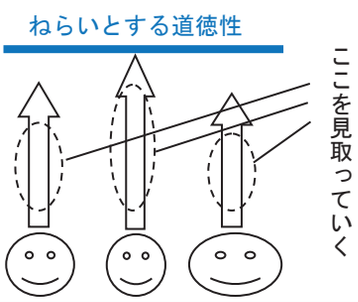
道徳科の目標からわかるように、それぞれ「よりよく生きるための道徳性を養うこと」をめざしています。しかし、道徳性は、内面的資質であり、道徳性が育ったかどうかを見取るのは容易ではありません。道徳科の評価は、次に示す点に留意して行っていきましょう。

児童生徒の学習状況や道徳性に係る成長の様子を継続的に把握し、指導に生かすよう努める必要がある。ただし、数値などによる評価は行わないものとする。

（道徳科の評価の基本的な考え方）

■数値による評価ではなく、記述式であること。
■児童生徒がいかに成長したかを積極的に受け止め、励ます個人内評価として行うこと。
■他の児童生徒と比較して優劣を決めるような評価はなじまない。
■個々の内容項目ごとではなく、大くくりなまとまりを踏まえた評価を行うこと。
■発達障がい等の児童生徒についての配慮すべき観点等を学校や教員間で共有すること。

文部科学省　道徳教育アーカイブ「特別の教科　道徳の全面実施に向けて」より引用




**個人内評価**

授業の中で、児童生徒一人一人の学習状況を見取っていく。

客観的に評価するためには、その根拠となるものが求められます。

授業中のワークシート等への記述、発言や他者との関わりの様子等の観察、複数の教員による授業の工夫（ＴＴ、交換授業等）など、週１時間の授業を充実させる授業づくりが求められます。

**大くくりなまとまりを踏まえた評価**

○一つ一つの内容項目ごとにどのくらい理解したかを評価するのではなく、学期や学年といった一定のまとまりの中で、道徳科の学習状況や道徳性に係る成長の様子を見取る。
○一つの授業の学習状況のみを取り上げて評価しない。

**一人一人の学習状況や道徳性に係る成長の様子を見取るときに注目する点**

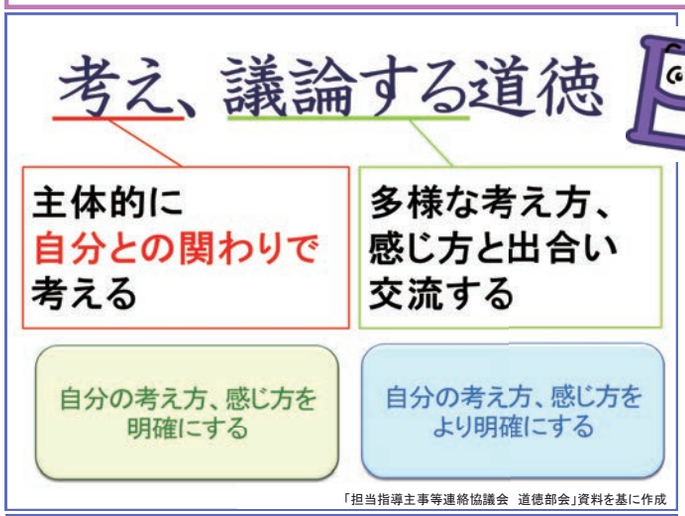
○他者の考え方や議論に触れ、自律的に思考する中で、**一面的な見方から多面的・多角的な見方へと発展しているか**

○多面的・多角的な思考の中で、**道徳的価値の理解を自分自身との関わりの中で深めているか**

評価の推進には、
○学習評価の妥当性、信頼性等を担保することが重要。
○評価は個々の教師が個人として行うのではなく、学校として組織的・計画的に行われることが重要。
**校長のリーダーシップが大切**

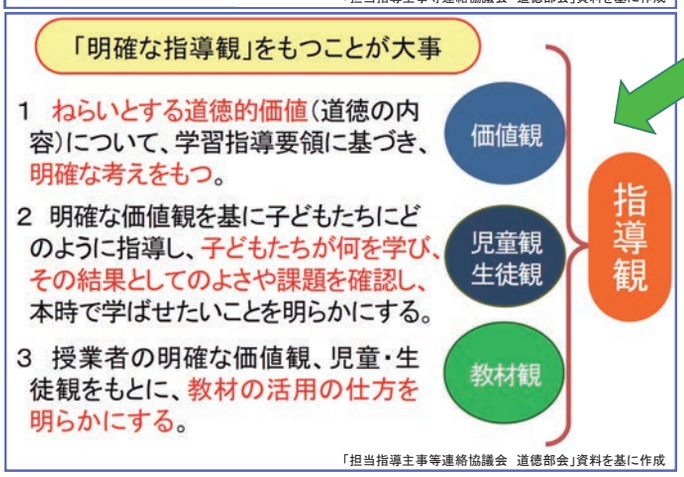
## ポイント⑤ 「考え、議論する道徳」を実現する

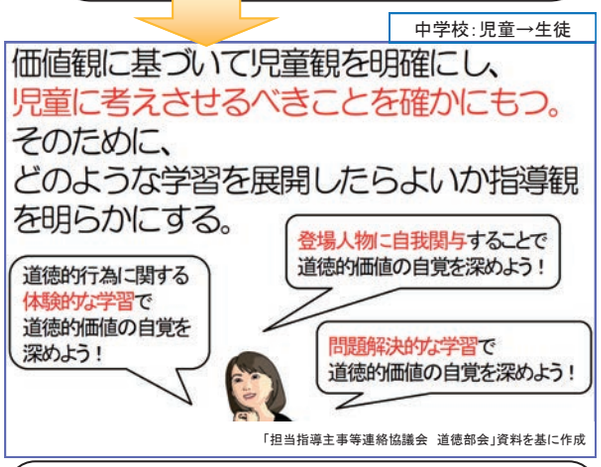
児童生徒が、自分の「考え」をもち、他者と関わり合いながら考え「議論する」授業とするためには、多様な指導法を効果的に取り入れることが大切です。授業の質的転換のためにも「考え、議論する道徳」の在り方について理解することが求められます。




児童生徒が、教材を通して、「私は」という自分なりの考えをもつことが大切です。そして、他者や自分自身との対話を通して、考えを整理したり新しい気づきが生まれたりすることで、自分の考えをより明確にすることにつながっていきます。

このような学習にするためには、「明確な指導観」をもって、授業に向かうことが求められます。道徳的価値に関わる自分のこれまでの指導を振り返り、教材を使ってどのような児童生徒の姿の育成をめざすのか等、計画を立てます。




話合いが盛り上がり、自分の考えを発表し合えていると、いい授業だったなと感じてしまいます。しかし、子どもたちが自分自身を見つめ、物事を多面的・多角的に捉えて考えられたかをしっかりと見取ることが大切です。「主人公の行動をどう考えるのか。」「なぜ、そう考えるのか。」など、子どもたちの思考を深める発問の在り方も重要になります。

登場人物への自我関与が中心の授業、問題解決的な学習、道徳的行為に関する体験的な学習など、様々な方法で、「考え、議論する道徳」の実現をめざしましょう。

「主体的・対話的で深い学び」の実現に向けた道徳科の授業を実践していくためにも、校長のリーダーシップの下、全職員が協働し、独自性を発揮した取組を重ねていくことが大切です。

# 授業づくり編　5 小学校外国語活動・外国語科

小学校外国語活動・外国語科の目標は、小学校と中学校の連携を重視し、それぞれの目標を関連付けて段階的に示されています。小学校外国語活動・外国語科での学習の成果が中学校の外国語教育と円滑に接続することを意識した授業づくりが求められます。

## ポイント① 外国語活動と外国語科を関連させて捉える

小学校中学年での外国語活動においては、英語の語句や表現に音声で十分に慣れ親しませ素地を育成することが大切になります。高学年での外国語科は、充実した外国語活動の上に成り立ち、実際のコミュニケーションにおいて活用できる基礎的な力を育成します。

| | 【外国語活動】 | 【外国語科】 |
|---|---|---|
| 学年 | 第3・4学年 | 第5・6学年 |
| 内容 | ・外国語に慣れ親しむ<br>・外国語学習への動機づけ | ・既習語彙・表現を繰り返し使いながら、「話す」「聞く」力の定着をめざす<br>・「読むこと」「書くこと」に慣れ親しむ<br>アルファベットの文字を読んだり書いたりする<br>単語に慣れる（見慣れる）<br>・過去形（went, ate, sawなどの不規則動詞）<br>・三人称（he, she）の含まれる表現 |
| 技能・領域 | ２技能・３領域<br>「聞くこと」「話すこと（やり取り）」「話すこと（発表）」 | ４技能・５領域<br>「聞くこと」「話すこと（やり取り）」「話すこと（発表）」に、「読むこと」「書くこと」が加わる |
| 指導上のポイント | ・指導者が、積極的に英語を使う<br>・聞いたり話したりする必然性のある活動を設定する<br>・日常生活に関する身近で簡単な事柄を扱い、子どもの興味関心にあった活動・場面を設定する | |
| 時間数 | 年間３５単位時間 | 年間７０単位時間 |

外国語の音声や基本的な表現に慣れ親しみ、「聞くこと」「話すこと」の言語活動の素地を養う外国語活動。「読むこと」「書くこと」に慣れ親しみながら、４技能によるコミュニケーションの基礎的な技能を身に付ける外国語科。これらの関連を意識し、主体的にコミュニケーションを図ろうとする子どもを育てることが求められます。

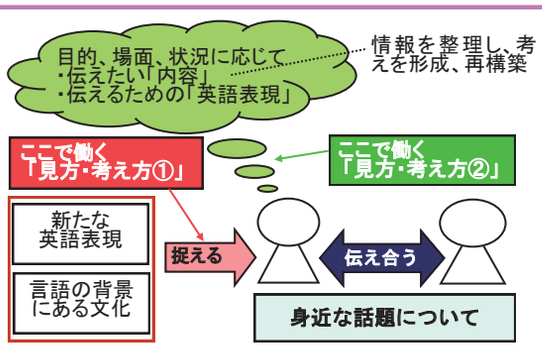
## ポイント② 言語活動を充実させる

学習指導要領では、「言語活動を通してコミュニケーションを図る資質・能力を養うこと」が、一層、重要視されています。外国語によるコミュニケーションの中で、どのような視点で物事を捉え、どのような考え方で思考していくのかという見方・考え方を理解した上で、言語活動を設定していくことが大切です。

「外国語によるコミュニケーションにおける見方・考え方」

①外国語で表現し伝え合うため、外国語やその背景にある文化を、社会や世界、他者との関わりに**着目して捉え**、
②コミュニケーションを行う目的や場面、状況等に応じて、情報を整理しながら**考えなどを形成し、再構築する**こと

「小学校学習指導要領（平成29年）解説　外国語活動・外国語編 P. 11~12, 67~68」



情報を整理しながら考えなどを形成するといった「思考力、判断力、表現力等」が活用されると同時に、英語に関する「知識及び技能」が活用されます。

**言語活動**
実際に英語を用いて互いの考えや気持ちを伝え合う活動

×

**指導**
言語材料について理解したり練習したりする活動

発音練習や歌、英語の文字を機械的に書く活動は、言語活動ではなく、練習です。練習だけで終わることがないように気をつけましょう。

コミュニケーションの目的、場面や状況を明確に設定する等、工夫することが大切です。さらに、単元全体のゴール、１時間毎のゴールを明確に示し、見通しをもたせた上で、「必然性のあるやり取り」が行われることが求められます。

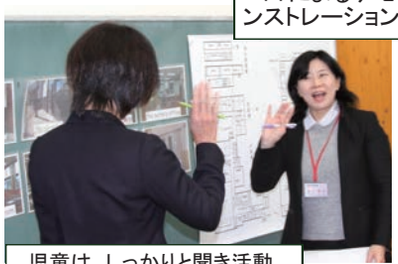
## 「外国語活動」における言語活動

「聞くこと」「話すこと（やり取り）」「話すこと（発表）」の３領域で言語活動が示されています。「互いの考えや気持ちを伝え合う」行為には、話すことはもちろん聞くことも含まれます。児童の興味・関心を考慮しながら、意欲的に言語活動に取り組めるようにすることが大切です。

**例えば、「聞くこと」の活動では次の点を意識しましょう。**
- **◆教員やALTなどの話す英語を聞く**
- **◆児童同士が話す英語を聞き合う**
- **◆音声教材などを聞く**

**など、話し手の考えや気持ちなどを理解する「聞く活動」を十分に行い、反応や応答を話し手に返すようにしていきます。**

外国語を習得していく過程においては、英語の音声に十分ふれることと、実際に使ってみることが重要です。



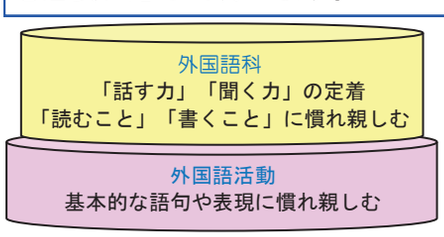
TTによるデモンストレーション

児童は、しっかりと聞き活動の流れをつかみます。

「聞くこと」をインプット（入力）、「話すこと」をアウトプット（出力）と捉え、インプット（入力）を十分に行ってから、アウトプット（出力）させるようにすることを意識して、単元を構想しましょう。

## 「外国語科」における言語活動

「聞くこと」「読むこと」「話すこと（やり取り）」「話すこと（発表）」「書くこと」の５領域で言語活動が示されています。「互いの考えや気持ちを伝え合う」などの言語活動を中心にしながらも、言語材料について理解したり練習したりするための指導を必要に応じて行います。




外国語科では、外国語活動で行ってきた言語活動を踏まえて、簡単な語句や基本的な表現などの学習内容を繰り返し使わせる言語活動を設定し、「聞くこと」「話すこと(やり取り)」「話すこと(発表)」について児童が簡単な語句や基本的な表現について活用できるようにすることが大切です。

### ＜外国語科で扱う「読むこと」「書くこと」の言語活動＞

**「読むこと」の言語活動について**
- **◆文字を認識するという基礎的な活動である。**

（例）ホテルの受付の場面を設定し、自分の名前の綴りを発音する活動を位置づける。
“My name is Haruna. H-a-r-u-n-a.” のように名乗る表現を発音した上で、名前のアルファベットを発音する言語活動。

「書くこと」の言語活動について
◆高学年の２学年にわたって継続的に繰り返し、文字を書くことを十分に経験させることが重要である。
◆書かれたものを参考にして、**書き写し**たり、**なぞり書き**したり、**選んで書い**たりして、自分の気持ちや考えなどを書いて伝え合うようにさせる。

音声で十分に慣れ親しんだ後、書く活動を行いましょう。

## ポイント③ 小小・小中連携で、教員がつながり、子どもの学びがつながる

**各小学校において、全職員で外国語活動・外国語科の授業改善、充実に取り組み、中学校へと学びをつなげていくことの大切さは言うまでもありません。しかし、中学校で共に学ぶ子どもたちであることを考えると、各小学校の学習の方法や取り組み方等について、中学校区ごとに共通理解し情報共有しておくことが大切です。また、外国語活動・外国語科を学んできた子どもたちを受け入れる中学校においても、入学前の子どもたちの学習内容、授業の進め方、様子等を小学校教員と共有・確認しておくことが大切になります。**

小学校における学びを中学校につなげ、外国語教育の目標の実現を図るためには、小学校外国語科と中学校外国語科の連携を図ることが重要です。小学校段階と中学校段階の指導目標、内容などを比較・検討し、それぞれの学校段階でどのような指導をするべきか明確にすることが求められます。また、小学校・中学校の教師間の情報交換の機会を設定することも大切です。

### 小中連携の実践例（桜ヶ丘中学校区の取組）

各中学校区では、様々な機会を捉えて小学校と中学校がめざす児童生徒像を共有し、学習内容や日々の様子等を情報交換し相互理解に努めていることでしょう。この取組が、中学校入学時の段差をなくし、スムーズなスタートを切ることにつながっています。外国語教育においても、積極的に小中連携を意識した取組を推進している中学校区があります。

**取組①　各部の中に「小学校英語部会」を位置付けている**

教科に係る部会として、「小学校英語部会」を設置している。

**取組②　中学校英語科教員が、兼務教員として小学校を訪問する**

中学校英語科教員が、各小学校に週１回授業参観に行き、小学校の授業の進め方や児童の様子を見取ったり、担任とのＴＴを行ったりする。必要に応じて、授業へのアドバイスも行う。また、４小学校の児童や指導者の様子を教科会の中で共有し、小学校の外国語活動・外国語科の授業への期待や中学校外国語科の授業に生かした方がよいことなどについて協議する。

**取組③　小学校４校共通実践事項を作成し実践する**

中学校英語科教員がリードして、中学校区内の４小学校で共通実践していくことを整理し、小学校英語部会の中で提案し「小学校英語授業実践スタンダード」を作成した。

小学校英語部会

「小学校英語授業実践スタンダード（案）」より

**１　４校共通実践事項**

①最初と最後のあいさつ（英語で行う）
②板書は、４本線を使って行う
③ワークシートは、４本線もしくは１本線が引いてあるものを使う。

④字体は全て統一する。（HandwritingWeCan：小学校新教材で使用されている字体）
⑤Listen carefully./Eye contact./Clear voice.を意識する。

## 2　学習展開の基本的な流れ

中学校英語科教員が、各小学校での授業展開の基本モデルを、小学校の外国語教育担当者に提案・協議した結果、児童の実態や題材に合わせながら取り入れていくこととなりました。実践しながら生じる課題に対して、改善策等を協議していくことで、外国語教育における小中連携が一層進むことが期待できます。

I can play
the piano.
I can run fast.

2．学習展開

めあて：どこの国へ行きたいのか伝え合おう。

| 学習活動 | 主な発問 | 留意点 |
|---|---|---|
| 1. Warming up | 本時に関連した既習事項や本時で使う単語・フレーズを練習しましょう。<br>（キーワードゲーム、ラインゲームなど） | |
| 2. Activity1 | 今日の大事な表現（キーセンテンス）を練習しましょう。<br>Where do you want to go？<br>I want to go to India.<br>I want to eat curry.<br>I want to see elephants. | ・テンポよく進める。<br>・口頭で何度も言って伝え合う。 |
| 3. Activity2<br>（メイン活動） | 友達にどこの国へ行きたいのかたずねたり、どこへ行って何がしたいのか答えましょう。<br>（インタビュー活動などやりとりができるものを行う。） | ・相手意識<br>・反応 |
| 4.Sharing | 活動で使った表現を発表しましょう。<br>（教師が質問を１列の児童に質問する。）<br>（発表する児童以外が、Where do you want to go？とたずね、それにみんなの前で答える。）<br>【効果】正しい表現や友達の意見が分かる。 | ・教師対児童の掛合は、テンポよく進める。 |
| 5.Writing | ①本時の学習内容をもとに、キーセンテンスをなぞる。<br>②なぞった後、表現したい内容を一部書き写す。 | |
| 6. Reflection | ふり返りをする。 | |

まずは、子どもたちが外国語の楽しさを感じられ、子どもたちのためになると思うことを、中学校区で確認しながら実践してみることが大切です。実践する中で、教員同士の関係が深まり、発達段階に応じた、より効果的な指導方法を協議したり、各中学校区に合った体制づくりを推進したりすることができます。

## 小小連携の実践例・工夫例

**＊英語専科教員の配置**

複数校の外国語活動及び外国語科の授業を担当することで、児童生徒の学習内容を一定に揃えたり、小学校卒業時の子どもの姿を中学校に引き継いだりできる。

**＊中学校区に配置されているＡＬＴの活用**

各小学校の教員や子どもたちの様子を知っているＡＬＴから情報を得て、中学校区としての外国語教育の状況を把握できる。これは小中連携、小小連携の両方の視点で有効である。

**＊小学校外国語活動・外国語科の授業公開**

積極的に授業を公開し、互いに参観し合ったり研究協議をしたりすることで、指導方法や日々の困り感を共有し、助言し合える。教員、学校のつながりを生むだけでなく、互いの指導力向上にもつながる。

**＊同一教材等の使用**

小学校で使用した教材や成果物等を中学校での導入等で扱うことにより、既習事項とのつながりを生徒自身が自覚できるようになる。

**＊振り返りシートやワークシートの引き継ぎ**

小学校での学びの足跡を中学校へ引き継ぐことにより、指導者は小学校での学びを把握して指導できる。

これらの方法以外にも、小学校外国語活動・外国語科と中学校外国語科の関連を意識した連携のための取組が考えられます。子どもたちに育成をめざす資質・能力を意識した取組が求められます。

**各学校段階で身に付けさせる内容を確認し、各中学校区、各学校の子どもたちの実態に合わせたゴールイメージに基づき「必然性のある言語活動」を設定することが大切です。また、教員自身が、外国語教育の指導に対して積極的な姿勢で関わることが、充実した外国語活動・外国語科の学習を実現することにつながります。**